ネオンアーティスト

安彦哲男

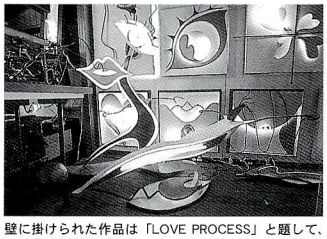
ABIKO TETSUO

京TIAN I.D.
キョーティアンアイディ
The 129th person

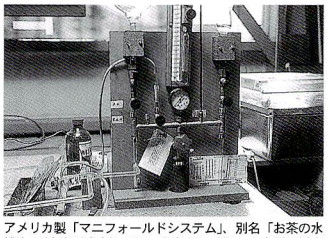
【プロフィール】京都出身。小学校在学中には上京美術研究所で油絵を学び、中高時代にはサッカーに夢中。大学時代ヨーロッパを放浪し、ロスでの遊学中にネオンアートに魅了される。1988年に再度米し、帰国後アート活動を始め現在に至る。

作品に込められたメッセージ ネオン＝看板と思うこと無かれ

1階の作業スペースに陣取っている看板は、安彦氏がプロデュースしたサロン「hair art Lien」のもの。「看板屋に非ズ」の姿勢は確固たるものだが、空間プロデュースを請け負えば、看板もその一部として作成する



壁に掛けられた作品は「LOVE PROCESS」と題して、2004年2月の個展作品集。順にテーマがあり、ストーリーが存在する。手前に置かれているのは、サッカーをモチーフにした作品。学生時代の経験が活かされている



アメリカ製「マニフォールドシステム」、別名「お茶の水博士」(安彦氏命名)。要は「ガス入れ機」。日本製は緻密すぎて逆に使いにくく、「何でもシンプルな方がいい」と安彦氏。ちなみに日本製だと800万円はする代物

information

STIMULATION IN FOREST

期間：2006年4月1日～10日
時間：17:00～21:00
場所：月眞院（高台寺塔頭寺院）
京都市東山区下河原町528
ねねの道沿い
http://www.bico-neon.com

「ネオン」と聞いて、何を思い描くだろうか。「パチンコ」「場末のスナック」あたりが正直なところではないか。欧米では既に確立されているネオンアートも、ひとたび日本に降り立つと、まだまだその程度の認識しかないのが現状だ。そんな中、「ネオンアーティスト」として作品をつくり続けるひとりの男性がいる。安彦哲男、その人である。'80年代、ホームステイ先のL.A.でバーに輝くネオンを見て衝撃を受けた。だが、その後しばらくは写真を撮り続け、家業である染色業を継いだ。再びネオンに触れたのは30歳になってから。実家の染屋を廃業し、決意堅く再度渡米。そしてネオン制作の専門学校で技術を習得した。ところが、日本へ帰ってきても仕事は全くない。アートというより、看板屋としてしか扱われないことにジレンマを抱いた。「メッセージがないのは作品ではない」と言う安彦氏にとって、自分はあくまでもネオンを使って作品をつくり、その作品で自分の内にあるものを表現するアーティストなのだから。「僕が見てきたラスベガスの看板はメッセージ性があって、博物館に展示されたり」と、アメリカでの理解度を羨ましく思う。

「周囲に理解されるようになったのは、10年前に高台寺で個展を開催してから」と、当時を振り返る。建築物の中にネオンを取り入れる表現方法に対して、実際に見てもらって生まれた数々の信頼。西大路三条のとあるビルには「光の森」と題した小さなミュージアム的空間をプロデュースするまでに。現在、ネオンアーティストとして活動しているのは、日本で安彦氏だけと言っても過言ではない。そんな彼が京都を離れないのには訳がある。「ここには常にエネルギーが流れている。モノづくりにはとてもいい環境」。生まれ育った土地であることはもちろん、感性を刺激するエネルギーの波動、面白い友人たち、彼らから得るいくつもの縁。全てが安彦氏のモノづくりを支えている。「ロスに帰ろうとか、アムステルダムに住もうという気持ちはあっても、東京へ行こうという気はない」。「ゴッホやフェルメールなど、オランダの作家は光を大切にした作品を生み出している。だからこそ、自分も一度オランダに住んで作品づくりをしてみたい」という想いから、今のマイブームは「アムステルダム」だという。とはいえ、当分は京都を拠点に活動していく彼の、「ラブ＆ピース」をモットーにした作品から多くのメッセージを受け取ってほしい。